

日本福祉教育・ボランティア学習学会 学会ニュース

Japan Academic Association of Socio-education and Service Learning

No.79

2022年11月8日
発行

発行人：原田正樹 編集委員：佐藤 陽 秋貞由美子 熊谷紀良
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F
[事務局：全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)] Eメール jimukyoku@jaass.jp

第28回こうべ大会に寄せて

大会長 野崎隆一 (ESD推進ネット兵庫・神戸代表)



28年前、阪神・淡路大震災が、私たちの街を襲いました。未曾有の大災害でしたが、全国から200万人近くのボランティアが駆けつけてくれ「ボランティア元年」と呼ばれたのは、記憶に新しいところです。「福祉」や「ボランティア」の概念が、平時とは異なる大きな転換を迫られる出来事でした。災害復興の法制度も整備されていない中、現場の情報をみんなで共有し、議論し、工夫を重ねて乗り越えてきたことを思い出します。

3年後に成立した「特定非営利活動促進法」は、市民セクターを支える多くの活動団体を輩出し、同時に「福祉」の多様な担い手の出現につながるようになりました。

私自身は、その後の東日本や熊本など災害現場で住まいまちづくりの支援を続けてきましたが、「生活再建支援法」に代表されるように、大きな災害のたびに支援の「制度」や「仕組み」が追加され充実してきました。しかし、被災の現場で動いてみると、私だけでなく年々何か窮屈感（閉塞感）が増しているように感じてしまいます。ここ数年、この感覚の原因について考え続けてきました。「法制度」「仕組み」を文明と捉えると、それらをつなぎ関係づける「知恵を絞る」「気遣う」といった概念は文化と捉えることができます。文明が発達すると、人々は「法制度」「仕組み」がなんとかしてくれると考えがちです。言い換えると文化が衰退してしまうのです。文明だけが進化してもダメで、文化がそれとバランスしなければならないと思います。

この学会のテーマである「福祉」と「ボランティア」は、文化に関わる概念です。今大会のあちこちに置かれた「ごちゃ混ぜ」とか「多様性」といったキーワードは、そのような閉塞感を打ち破る方法について、みなさんと一緒に考えたいという思いを込めました。二日間、みなさんといろんな場面で意見交換できることを楽しみにしています。

重要 このニュース最終ページ **Information** で総会資料のダウンロード方法を案内しています